

四十 スパイと泥棒

昭和十七年十一月十日、兄といっしょに山本英輔海軍大将を訪問するときのことでした。山本大将のお宅は品川駅の近くだったので、私は駅前の電車の安全地帯で兄の来るのを待っていたのです。兄は要体教育の実演をさせるため両洋中学の一年生四名を連れ、そこで落ち合つて山本大将を訪問することになっていたのでした。

そのころ私は愛国百人一首を一首ずつ速記文字画にするためいつもノートを持っていて書いていたのです。その時も安全地帯に立っていてノートにいろいろ書いていたのです。そして時々、もう兄が来るかと右の方を見ていたのです。ところがその時です。警察官が来て私にちよつと来いというのです。私は何の事かわからないので、何の用事ですかと尋ねると、ある宮殿下があそこに変な奴がいる、スパイかも知れないといわれたので連れに来たというのです。私がノートに書いては右の方を見る。ノートに書いては右の方を見る、兄は右の方から来るようになっていたので右の方を見ていたのです。戦時中のことですからスパイと間違えられたのです。ちよつと来いといって派出所に連れて行こうとするのです。それで私が、兄といっしょに山本大将のところに行くので、兄の来るのを待っているのです、ノートは愛国百人一首の絵を書いているのですと話しますとよくわかつてくれて引つ張られなくてすんだのです。